東日本大震災時の学校対応

石巻市立大須小学校

１　大須小学校の概要

マグニチュード９の震源地に最も近い小学校。岬の高台４０ｍの場所に立つ，開校１０年目の学校である。校庭には同時に３機のヘリコプターが離着できる広い敷地がある。校舎は３階建てで，どの場所からもスロープがあるバリアフリーの施設である。

震災後は，周辺の小中学校が津波にのみ込まれ，隣の小学校に行くのに１時間以上かかる学校となる。

＜大須小学校の全景＞

２　震災後の学校の動き

（１）震災当日の動き

14:46　地震発生

14:55　年度末の大掃除のため，全員で掃除中であった。地震後，校舎３階より昇降口前に避難し，点呼により児童全員の無事を確認する。

15:00 頃　大津波警報発令　大津波の恐れがあるため，児童を校舎３階に移動させ，待機することにした。

15:20～30 頃　校長，用務員が１０ｍ以上の大津波を確認する。（宇島漁港，熊沢漁港）

15:35 頃　地域住民が避難してくることを前提に，校舎・体育館の破損状況を確認する。体育館は天井からの落下物があり，避難所を校舎に決める。市教委に電話連絡しようとしたが，電話不通（防災用電話）のため連絡できず。児童は３階で担任と一緒の行動をとるようにする。その後，ランチルームを小中学校の児童生徒の避難場所とした。

15:50 頃　地域住民が多数避難してきた。地区ごとに，校舎２階以上の教室，特別教室を解放する。一階は重病人，足の悪い人専用に確保する。

〇大須地区・・・・・・３階オープンスペース　３・４年生教室　５・６年生教室
少人数指導教室

〇羽坂・桑浜地区・・・視聴覚室

〇熊沢地区・・・・・・英語活動室

16:30 頃　敷地内にある自家発電機の試運転を開始する。

17:00 頃　大須小学校避難所を開設。石巻市の避難所運営マニュアルを参考に，大須小避難所本部を立ち上げるための準備をする。行政である雄勝総合支所は，津波により全壊し，総合支所そのものが機能しない状態にあった。そこで，行政に頼らない避難所運営を行うため，組織づくりを提案することにした。

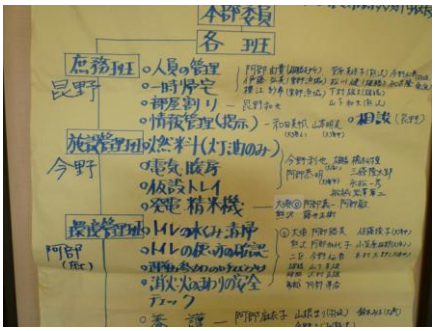
18:30　校長が各地区会長に対して，大須小避難所本部会議を開催するよう要請する。また，本部長・副本部長を消防団の分団長にお願いすることを確認する。大須小校長・大須中校長は本部会議の運営委員のメンバーとして，運営の中心になって組織を動かすようにした。

本部会議のメンバー　（初期の運営組織）
本部長，副本部長，各地区会長（大須・羽坂・熊沢・桑浜・船越・荒）
大須小校長，大須中校長，船越駐在所長，大須地区市議会議員
庶務班リーダー，施設管理リーダー，環境管理班リーダー，食料物資班リーダー
炊き出し班リーダー，各部屋長

19:00 頃　学校の自家発電機を使い，校舎内に電気がつく。石油ファンヒーターなどの暖房器も使えるようになる。
・保健室を重病人専用の病室にする。
・教職員で各部屋の表示を作成する。

22:00 頃　大須小・大須中の管理職，本部長が，第１回の本部会議のための打合せをする。
・燃料の調達について　→　地区会長，東部漁協燃料部
・食事（炊き出しについて）　→　各地区婦人会長
・水の確保について　→　大須宮守　他
・今後の職員の動きについて　→　大須小・大須中の連携
・病人の管理について　→　小学校養護教諭　（中学校養護教諭不在）

24:00 頃　職員室消灯
1:00 頃　自家発電機に軽油を補給し，仮眠する。
4:00 頃　起床



＜災対本部の組織図＞

（２）　震災翌日の動き　３月１２日（土）

5:50　第１回本部会議開催
・本部長・副本部長の選任。
・ガソリン・灯油・軽油の調達をお願いする。
・各地区に，米の調達をお願いする。（学校には備蓄がないことを伝える。）
・体の不自由な人に体育館のマットを提供する。
・婦人防火クラブに炊き出しを依頼する。（おにぎり６００個）
・船越・荒地区の米も準備するよう依頼する。（船越小学区）
・荒地区の湧水を飲料水として確保するよう依頼する。（沸騰させ，飲み水に）
・被災しない家庭より，トイレットペーパーを提供してもらうよう依頼する。

会議の約束ごと　＜校長よりのお願い＞
① つらい立場の人の身になって考えること。発言すること。行動すること。
② 客観的に冷静に判断すること。
③ 言い方に十分気を付けること。
④ 行動する前に上の指示をあおぐこと。
⑤ 行動する前に落ち着いて再度確認すること。
⑥ ゆっくり，落ち着いて分かりやすく話すこと。

11:00　第２回本部会議開催

・船越地区の住民５０名（要介護者３０名，大怪我５名）受け入れをする。

・２階コンピューター室を船越地区に開放する。

・船越地区の重病人を保健室に移動する。

・明るいうちに人数を確認する。（部屋ごとに名簿を作成し，食事を提供する。）

・雄勝地区（明神住民５０名）受け入れる。子どもと病人は最優先で受け入れをする。

・精米機の有無の確認をする。（玄米で保存している家庭が多い。）

＜各地区の状況報告・協議事項・確認事項＞

・ 名振地区　全滅　　船越地区　９割被災　　雄勝地区　全滅

・ 立浜地区　全滅　　大浜地区　全滅　　荒地区　2/28被災

・ 船越駐在所の所長より，警察無線は使えることを確認。

・ 雄勝消防署長より，仙台１０ｋｍまで浸水。気仙沼　延焼中

・ 灯油３００ℓ（２日分）確保　・軽油１００ℓ（２日分）確保

・ 船越地区　５０名（５名は重症者）次は体育館通路へ

・ 河北警察署刑事課　刑事さん　明神から SOS のため来校

＜雄勝公民館の上のバス＞

15:00 第３回本部会議開催

・避難所の人数確認　４２３名

・校庭に「SOS」を書いたので，ヘリコプターが下りるかもしれない。ヘリコプターが来たときのための要望リストを作成する。（薬，燃料，食料など）

・避難所運営組織図を作成する。具体的な提案は，明日行う。

・水洗トイレが利用できないので，プールの水を汲み，それを流すよう依頼する。

・校舎内が土足になっているので，部屋と廊下の清掃を依頼する。

大須小避難所のルール　　※小学校教員が発案。数か所に掲示する。

スローガン「　**助け合い・ゆずり合い・支え合い**　」

① トイレ（紙は流さずゴミ箱へ）（自分たちの使うトイレは自分たちで掃除をする。）

② ゴミ（ゴミは種類ごとに分ける）（ごみはつぶしてゴミ袋がいっぱいになるまで使う。）
（空き缶に吸殻を入れない。）

③ ペット（持ち込み禁止）

④ 電気（限りある電気。発電機の使用は暗くなるまで我慢する。節電をする。）

⑤ ストーブ（油係りが午後４時頃から入れる。それまでじっと我慢する。）

⑥ 喫煙（喫煙場所は玄関前です。喫煙場所以外では，吸わない。）

＜各地区の状況報告・協議事項・確認事項＞

・新北上大橋がない。　大川地区　ひどい状況。　雄勝　ひどい状況。

・雄勝，牡鹿，河北，北上地区への陸路はすべて不通である。（陸の孤島状態）

・炊き出しは１日２食と決め，地区ごとの係にお願いする。二日目にして，初めて小さいおにぎりを配布できる。

・防災ヘリコプターが来たら，必要なものを依頼するので，要望書を作成する。
・ろうそくの設置　　・各部屋にライトを設置する。

（３）震災３日目の動き　３月１３日（日）

6:00　第４回本部会議開催

・運営組織の原案を作成し，了承してもらう。(石巻市の防災計画の運営組織を使う。)
・避難者名簿の作成を依頼する。(地区ごと)
・各部屋より，水汲み（飲料水）の当番を依頼する。また，ろうそく・電気の当番を依頼する。
・ゴミの分別を依頼する。
・食事（朝夕　おにぎり１個ずつ）を配布できることになったことを報告する。食料物資が当分の間入ってこないことを想定し，避難住民全員に我慢してもらう。
・教職員は，名札をつけ，相談や校舎，体育館の見回りをする。
・危険物（ガソリン・灯油・軽油）の管理は，油の担当者を決め，安全を確保する。
・小中学生は，日中職員がつき，勉強したり，運動したりするよう指示する。

組織図の原案

本部長
副本部長
運営委員
各　　班

庶務班　○人員の管理　○一時帰宅　○部屋割り
○情報管理（掲示）　○相談
施設管理班　○燃料（灯油のみ）　○電気・暖房　○仮設トイレ
○発電・精米機
環境管理班　○トイレの水汲み　○清掃　○トイレの使い方の確認
○運動参加の呼びかけ　○消火器，火の周りの安全チェック
養護班　○養護
食料物資班　○食料管理　○生活物資管理　○水の確保
炊き出し班　○朝・夕の炊き出し
各部屋係・責任者

＜各地区の状況報告・協議事項・確認事項＞

・防災ヘリが来たら，５か月の幼児と腸閉塞の可能性の２名を最優先とする。
・一時帰宅の許可について検討する。大津波警報が解除されているかは不明。
・ふとん，毛布の持ち込みを大須地区に依頼する。
・飲み水については，荒地区の湧水と熊沢地区の湧水が使用可である。
・明神，名振，大浜，立浜は物資不足である。行方不明者２０数名。

12:00 第５回本部会議開催

・運営組織図を提示する。各部屋の責任者を決めてもらう。燃料係を追加する。

・動物，ペット持ち込みで，苦情殺到する。犬等のアレルギー対策も検討する。

・トイレの使い方を再度お願いする。（紙は流さない。水を流しすぎない。）

・中学生がトイレ掃除を行っている。（自分のところは自分で掃除する。）

・養護教諭は医者ではないので，治療や薬の処方はできない。

・避難してきたお年寄りに対して，小中学生がストレッチや体操を教える。（動かないと血栓ができ，歩けなくなるため。）

・各部屋に消火器を準備（消火器の位置を確認してもらう。）

・燃料運搬は消防団だけで行う。

・各部屋で３名を選び，おにぎりの配布を行う。

＜各地区の状況報告・協議事項・確認事項＞

・支援物資は林業センターまで来ているらしい。

・立浜に２遺体（雄勝病院の先生）。公立雄勝病院は屋上まで津波。

・室長は地区会長　他２名選出（消防団以外）　　他

15:00　第６回本部会議開催

・避難所の人数確認　５０６名

・運営組織図に，各地区から人選した名前を入れてもらう。（それぞれの班ごとに集まり，話合いをする。）

・物資は何も入ってこない。物資が入ってきたら地区会長を通して配布する。

・学校には，備蓄がない。地区から提供された米だけが頼りである。

・炊き出しは，学校・大須憩いの家・保育所の３か所でお願いする。

・他地区の人数が把握できる表示を作る。（荒・船越地区，立浜・名振地区・・）

＜各地区の状況報告・協議事項・確認事項＞

・13 日の夕方まで道がつながる。雄勝，真野林道を通って，稲井へ抜ける。

・石巻市内も津波で大きな被害を受けている。

・薬は使用者名を入れて再提出。医師，看護師の派遣はできない。

・婦人防火クラブが炊き出しの中心になる。各地区の婦人会長に，本部会議に参加してもらうよう要請する。

・林業センターが避難所として４００名，たき火で暖をとっている。

18:00 頃　雄勝の伊勢畑地区の住民１７０名程が大須小避難所に避難してくる。体育館を避難所として提供する。電気と暖房，毛布を提供する。

（４）震災４日目以降

・避難所の人数確認３月１５日には，７４３名が学校に避難してきた。旧雄勝町の６割が大須小避難所にいる状態であった。大須小避難所と常に一緒の行動をとっている荒・船越地区を合わせると９５１名の避難住民の生活を維持していくことになった。

３　避難所運営と学校運営

（１）混乱期の避難所運営

学校が中心となり，避難所が運営できるようになることが，避難住民の混乱を避けられると考え，いち早く運営組織を立ち上げることにした。そこには，地域の信頼されるリーダーが必要であると考え，消防団にはたらきかけ，総指揮を分団長にお願いした。このことは，震災発生前の地区の組織を生かした指導体制で臨むのが混乱期を乗り越える裁量の手段と考えた。しかし，一つ一つの提案は学校が行い，協議する段階で，組織を使い全体の統制を図った。

また，学校職員は，庶務班，施設管理班，環境管理班，食糧物資班等のリーダーとなり，避難住民とともに，役割分担を理解してもらい仕事を行った。いずれは避難住民だけで組織が運営できるよう，避難住民の中からリーダーとしてふさわしい人物を探してもらい引き継ぐことにした。震災後２週間は，学校として機能は全く果たしていない状態であった。

（２）安定期に入った段階の避難所運営

避難所の運営が安定してきた４月には，大きく組織替えを行った。各地区会長が本来の地区リーダーであるため，地区会長から本部長を選出し，学校からは管理職だけが組織に残り，学校再開を目指した。地区住民は，小学校の再開を強く望んでいたので，３階のスペースを空けてもらい，教職員も各班のリーダーを引き継ぎ，学校再開の準備を始めた。４月８日には昨年度の学年末の補充授業を再開し，学校と避難所の共存がスタートした。

また，学校を空けてもらうことにより，学校内に避難している人と自宅避難している人が共存することが必要不可欠となった。そこで，地区ごとの人数割で物資を分配するなどし，調整を図った。自宅避難している人たちへの情報提供として，「大須小避難所だより」（別紙資料）を作成した。そのことによって，安定した避難所運営が可能となった。さらに，避難所にいる避難住民の食事の準備は，学校の家庭科室だけで，行うことができるようになった。避難所の食事作りは，避難住民がグループを作り，１日交代で朝夕の食事を作るようにした。

４月下旬，法務省矯正局の職員が行政から派遣され，受付，治安維持（昼夜の警備），清掃，食事の運搬など避難所運営の全般の業務を行ってくれた。

（３）安定期の避難住民が運営する避難所運営

５月中旬になり，電気・水道が復旧する地区が増え，自宅避難民も自立することになり，自宅を津波で流された避難住民だけで避難所を運営することになった。運営組織も最低限のものを残し，問題等が起こったときだけ会議を開くことにした。ここでも，小学校の管理職だけが，運営組織に残り，さらに新たなにスタートした。避難住民だけでの避難所運営が厳しいことが予想されたので，ボランティアをお願いすることにした。ＮＰＯの団体や大学の学生を募り，食事の準備や清掃をお願いした。

４　震災から学んだこと，そして，これから考えたいこと

・学校と地域が寄り添った教育活動を展開することで，どんな震災が起こっても，耐えていくことができることを学んだ。地域とともに歩む学校づくりを今後も続けていく。

・行政との綿密な連携を図ることで，減災できると考えられる。

震源地に最も近い，岬の大須小学校

東の方向約１５０km が東日本大震災の震源地である。ものすごい地鳴りの後，３分以上の地震が続き，津波が押し寄せた。１０m 以上の津波であったが，４０m の高台にある学校は，津波による被害は全く無かった。（写真上が東の方向になる。）

広大な敷地があるため，ヘリコプター３機が同時に離着することができる。震災当時は，同時に２機のヘリコプターが着陸したこともある。ヘリコプターは，病人の搬送や支援物資の搬入のため，１日４～５回の離着をする日もあった。

避難所となった大須小学校の様子

校地内に入浴施設（入浴支援の準備）

桑浜（学区内）のガレキ

支援団体からの炊き出し支援

福井のパン屋さんから支援

避難所となった体育館

日赤の医療チームが大須小で診療所を開設